

8
7
6
5
4
3
2
1
0

JAPAN

10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0

Takumi

前太平記圖會

一四





相馬内裏兵火將武討記

おまへ第一貞世が討ひよ我と勵まし軍將將まよふをもて其の兵三千餘騎専攻せよとある貞盛も陣を下せ短兵をもてたんと追れ坐てそ攻うちれ於くまざらすも我とぞとぞふとせしむ武も勢優と公勢と忽進今あつて味方と射るるね武もも圓をかく相強ひ勢又百倍強と所と集令れりて死すうと今敵を滅するよ落と總の若どももとばれされば武と經んと我もくと死令とりらればや筋あたるともがみよにうんすりへばく臍を切んとるひるはるの兵十三強もまことに付かくら捨味方の勢又引ひき敵の勢又相克りく態と味方と同士討へく近河邊の難のほよ引遠く忽進を命と出因の時又お奥猿く心辭よ後をぞ切してうかるからひれ不相手の津を固くうくる文丘好采へ平治繁盛の勢よとく者を二人も神しばく三を主ひけり軍役と兵をや明くよ那ま入相の新内裏又火狐をさればお

ア東の邊より流風列車馬のどあるを八方より敵三千
銃弾が向又三十餘ヶ所同時より下りたまがる煙火也と掠り猛火東あふ哉う
其下より一萬餘騎の兵がれ入く度とうきる敵もとあく切伏せかへおに
突伏せあくひ馳令を引ひて馬をく首がれもあくあくとまへ邊とまに記
さうもあく生捕ふ捕、アあくこも殺す丘が火攻めりよりよりとも令恨と罵
珠玉と勝てく官發機閣一時は死焼とあり後着屋のあくとぞに百又十
餘ヶ所一宇もあくば燒失うる焼よ迷る安幸船とも右往左往逃走ひ
のゆ氣のよもよび徳主まろび々々分母あまやまの罪人が焦熱
身とやまと力ふ劍杖と骨の貫貫林平の槍の下よ雪耳もがくやとぞひ加
まくさんほほも止ばぬよも迷ひつあさゆ車どもあり
平時門跡を詰ね討る

平時門跡記述行付記

出でては廻り別處多路經由へ難子より安樂とすまへ居るが今約二十余年

我のゆけ合ふもわちあひて付せ我身もゐむずく負ひとば今いとそもそもよれ歎
まひきく自害せもやとひ流よ難のよ事あひとよろし、也く有情第一
人をもあらやあひ一人あらも敵と付く切ひにそとく付めきとる兵八百
十騎同士馬を坐と仰り因ふち扇千時七千餘騎かくわへる真中一か千
尾角八面よ切く回りはとを抜く味方とうすとぞびり十七騎ぞおうタク多毛を
ぬぐて昇り又のきくとほほ十八騎用と馬とおせね門が車庫よまく
やくるが法方の攻めまか放まく兵入略討と仕くべて敵のいゆご邊付さる先に
停自宮山之御内清先と往く記安のよれの御内をも仕うりんといひもあた宵
稅とて後一文字よせた切く其刀を抜くわ行がまくよとせたうらうよぞ体く
きの十七騎のあひて帷幕の前より事居つてうちごく内核よどきうるわ行を
とくとく給あれ考ともがひまくか敵の三百も千も切くまとよれ敵とさんざ達
き眞途の裏内をもますぐまくわ興國もあく坐とし相逐ふ兵三百餘騎



前二八三十三



今成吉思汗と云ふて貞盛秀郷の本勢二萬餘騎よそひての模合より意
合はれ撃走し、免鱗は連の鷹翼の間く恩とも縁とも無てて死んでゐる門を
合戦の度々毎度我よりした兵士は鎧甲も刀刀も羽林も一隊のみを
口毛の馬もま進むたも一所より退くとたも共に引手返がるも望す所
仰坐て成る門何と成る事従もまことに立つておきうる今ともあらでく十騎のぬ
門唐突あらずおせすが終り又まく強すく之の兵士が悉く討死してそのかの
勢ともあるひは付と感をすちびりともに起るやうに御門一人よぞ成ゆる者も
敵の陣中とかけ西う向を矢矢を放すも立破局切車切裏の衣をけんへんちよこを
毛後勝難とみのりけよ返させ付のるよ七十枚猪切く彦一クのを刀も力も
も鐔年うらわらとおなづれば人まとへろげ入盡よ成く猶全てへるませ様
首は遂る敵と追ひてひ縁角折ぐ人疊よりげうれしがすとよ處の者又八十
人程のうちまほひ落と血が吐くがまもあく處へ接とおれよと高遠も

八もあり其形勢へうる千騎嘗百鳥獲と名セとくともあまに色どとくく
同吟（うき）／＼とどもく計アヌ／＼とあに奥州の任人岩沼八角敷車とく坂東の相
撲のよひ力ハ六十外人が力と名くるがお門よ御んとくと櫻うのりをすせく実
も頬腮尋半の者よあつて眸達よ列夜顕左右方（生分）其長六尺又鋒て
とく左左の腕筋立と薄の汁を極くるがとくある力も長く生居て今別力士の
荒るりんもがくやと名づかうありお門よ御うとぞとくとお若ひ女多
傳の小冠者系五十人奉とびとくらひをの事とく仕事とくとくとく眼筋よ
然ふくとく付記よろ公見とくとく我み縫んと通付こそと膳勇ある板斧と
か殺差至の勇士とくとくあるゆべと我よとけりと可憐若者とくとく
事あゆうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
八年同く情れ故の度言ちいと其儀あく目よあくとと死ぬ付ね門よ御て
左經紀とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

左の手を下と搔いたの手もと腰の上をと變りて推れ骨權け肉
ちをまくあの肘と枝木生まる成ると上草帽ぐら杖十丈つら搔う
されば鐵莖よ成く、先とさうともとひへ八席よがくのどく成るよび取く
ば者もあく陣を廻く十方よりゑのとく付うるもれど其身後石にと
すありとわ奥の室やよううとん縦權い亂打と苦が近しく一矢も立ざれば
平あくまでそにのれやれ所よあえの方すり思ふ一むく難くまゆ中よ向羽
の馬矢川も筋とびりつありまてお門が陣中へ天地よ言くごうど筋不
る後やる門がまよるハ稻妻糸毛とく東圓の後足あらじが急風あつ吹
とま直一折もあらじともは二も傷だ本馬よまへぞくほくまよくこにあら
ぞ居くらうるあくまとおきな壁かわう又の絶あれどを死よて夫婦くわくとくと
わ奥ねぎやく坐うるの財もの牛と相まくおせつがまくとおふまくとて坐
とあまくニヘ張よ十二束三伏をとびり引くもと夫婦をくみく切く放ば

滅よ三倍の大行者の隊伍護持の法力もや依くん六鈴鼓義の雄音惟げ一矢よ
そりまて其念力もやううとそよ天不を遙くにめりの甲のあ向の眉眉間のま
み筋と碑と體を破く頭のあとと一夫虎白く射出くろれが一もきぬの猛ぬ
あまくも僅の矢一箭の眼くまうんとびりよ馬ようの弓をめくられが矢を喜
御めくらや鳴と矢呼びく走りあく起くも主に首筋搔くびり腰に倒する
味方の芳いをくまとあらん植公教くをそくは猶時吹くとてうる道モ
むれはく處ての天罰ゆく矢くはまくは矢來よ遠びなら半ちとひをくると月
月ひまご地よ萬ざか寄物のやとぞあがめた大草原に弟ね平ひまく三月の秋
字孤掌をくへ痛む餘多歎くしが其病へあご瘡だるにだつもあらば本陣の
帷幕の中よ居らしがお門はとびと向く敵の馬を迎くよまべ脚をね因てお
えよ首を伸すとてとひをばれ又うと首を崩し其力とはよ牙のア競
う抱負くぞ果よううるス角をおへてもやすに手の別の始より其姫が三年候



多く平三義の平修羅とひ久を自ら敵死切く爲にと十一勝陣を駆け
奉八を立あつてぐる勢をぐくは且二日修羅もぞ威みをもアリとす
大お門付くるは敵の陣中よりもて間賊殺みびとし閑とれども、然
こそともひ自害せんとしらばくう後方の援をもん極まんへ楚惣の事と
あひてく三百修羅とがわいとの及によめり無くう邊の勝平陣より
くるに合戦れ平と始て一勝算優數十人極をもん自害と云ふ事と
さくべ同く股を切らんと虎とお異名殺をて西敵東夷すり通るもあらか
きくべ猪の合戦を上げてうれにせば冥途も体をもとびかんと云ふ事と
ちくによん乃連おもんとまをえをえの後の事也ねと大勢をもとる全蜀も撫
を戮ひきも居墮闇の役人全蜀川孫又弟と名をもくねるとかくも人殺を産上房
下と取せしむるおれの殺す所ひと直へがえ本力や筋アタケはひよ孫又弟と云
ておもく首とく全蜀孫又弟と名をも殺す矣をせうめあうね武がらま

草摺身とよ達きぬよニ刀子と利きく弱きと引ひけ合ひく首公摺身に
也のほ小達の一類一百六十條人合ひくと付と其かあとの後章平方と別
て爲折りうきぬる平二年より人合ひく二年よりもぐまく秋を
のち者と極ちよ成犯一作あひ送ひ人合ひく背負ひ其の遣名本と前後十四日
のちよ一門徒類まく滅乞一東國流す醉酒可うあまうもうと運のゐ
ふとくひひうきくとくとくと盛秀郷の忠烈と徳主と其威を感じたる功と
称す者もあらう

權守興世被生捕

平城門をもくと達類めく滅乞一其妻子眷属のまもあひとよ逃る身ひ
赤らむる深ゆ空か入らむく妻の衣をかすり縫へみの不綻と水くは人と成る姫
禍よ少と妻とく犯馬の前よせをむむ邊ふ林よ逃るまとも一隊の將も多
きがふと食ふ被を構怪の傷ま橘バ太納ともあらば狼のあらばと

主張勢じり奉どもあら其半ヨリ參守真世ト十三日の宵に敵の若陣
あ一トモ強敵と脅時よ退退けは類あん忠誠あくべ其誠よ體力や疲立さん
前後もかくに森へん其腰もひくゞぎふ敵ればよ入る處左右ようやく近づく
東苑南ゆき切くからえび度と生人物具ともあまそら矢ともあまそ狂病
休み寝もく坐り度せ走るが如國公捕もあく處行十四日のまよつてある本
院虎あわけともあくへりく事もあくへりく
あまと納く能くを葉きる今國くもあ敵もあくへりくが獨ど残
のびくても誰となぐゆとかくさざな方もあくとも通と命令人ひと
所く被ふやともあくともあくまで是のびくと主ゆんも情嘗また
さんふも號くと号死ふと引齒て歎氣あがめと經唇にしきすやをと
とちひ定く刀を抜く虎よ寂よ寂よ寂三木もあじが流ふとて命令にこえあ
くと力と家と納め一ト先達の方へり取る事あく筋方とも主忠誠とてたゞく

とおもひうれひだすへやあうさん又王守ゆめうらまんじゆをまほくわ
ゆうりつ邊ひ行十又日の西方よと尼園住小の衆人よさんとドと袖顔と掩
ひ隠して恐く通う氣ども給れてもふれ姿あとが面前一百姓見
あやしくて何者あきび單毛よう恐く通るぞと二三十人追れ廻りを參
くと攻々と真世ヤタル定くあく鬼もあく圍及びゆくん武能守真世
よとまのあく厚世の半の情とへゆうの因で憐をたまともにしてやれ
ご百姓もととせく何物かの様某とや年老枝多の首末の眼と瞬一言ば
荒らげまく虚と云様公事一とそぐて因果免てくか」も行もあん來
まむ事よそれへちや鶴よと鶴歎深錦うしもくとくとくに「春風拂げど
三の絃すす柳葉うきひがく同もあらまねおうもれみの絃よむ豊秀
卿へ捕付ひの首領へ二百六十三相手の内裏の縫跡ま行繕にうけま
とうまく身をもと付て一席厨三席ね頼だ書院は弟の年。又弟も年。六年



わ年清麻別當主文治經略文部好集。若水主義は玄陽坂上通す。御兵
真世。東三年氏教大須智平内附。長綱七郎保附。源氏信高則。國井
支武偶因九弟。若真。内忠治主文源に入道。周鑒其介へて其名號にそに
て。あらわし。又。大。は。櫛。と。あ。よ。觸。と。山。谷。の。途。過。ま。る。其。般。を。知。る。
小相馬。南相馬。修。廣。辛。勝。か。く。命。と。頃。と。の。船。合。七。千。三。百。條。人。あり。幡.
下。一。葉。新。感。の。宿。固。か。く。須。與。外。今。下。と。編。一。車。を。う。と。ひ。下。年。無。乃。の。積。
烈。か。く。冰。劫。苦。孤。主。一。車。と。か。く。一。車。の。か。ひ。と。唯。幕。と。張。ら。せ。若。川。か。
五。方。長。刀。の。血。を。あ。く。を。駆。金。を。穿。を。兵。奥。裏。く。江。酒。を。せ。む。一。々。も。経。
守。真。世。が。首。立。き。う。れ。立。ぐ。ゆ。約。に。立。く。が。も。燈。そ。る。か。や。あ。ん。か。わ。ち
行。た。も。や。う。と。想。する。者。も。あ。う。れ。ば。太。運。の。張。年。園。く。流。き。園。中。
今。に。及。ま。だ。方。へ。う。と。う。の。求。を。こ。る。か。れ。所。上。緑。圓。伊。ゆ。海。あ。在。
驅。を。捨。守。真。世。が。生。生。起。成。る。と。都。立。ま。を。羽。木。と。寒。根。よ。ぬ。あ。物。鮮。

あ。だ。お。ひ。か。人。即。在。廻。も。と。う。と。廻。な。の。引。出。也。下。あ。る。と。房。の。後。軍。吹。
奉。さ。れ。き。じ。り。一。會。ら。と。廻。く。真。世。が。首。と。卵。又。割。よ。れ。と。主。屋。く。主。屋。お。之。ぞ
か。け。ら。と。タ。れ。

富軍上唐賜恩賞

斯。く。あ。の。お。連。よ。く。板。車。と。ご。く。難。ま。れ。ば。賦。う。相。馬。小。治。弟。平。の。門。看。と
お。せ。天。至。三。年。三。月。廿。八。日。起。よ。凱。陣。す。と。是。日。先。陣。よ。上。年。を。久。益。日。全。分。平
信。聲。盛。日。平。三。年。は。下。總。か。良。村。常。隆。か。重。良。義。上。野。分。乙。免。甲。裝。兵。御。保。益
平。左。近。お。益。家。友。村。國。久。希。好。文。と。し。や。く。く。家。院。の。門。三十。終。騎。教。合。其。勢
不。善。終。勝。不。駆。後。多。次。兵。守。主。列。公。引。く。お。せ。う。後。陣。よ。ハ。田。永。益。ら。秀。卿。合
守。益。深。紫。卿。日。益。三。主。卿。日。益。永。卿。日。益。久。卿。日。益。友。卿。秀。卿。の。息。男
國。永。主。而。平。時。日。益。弟。千。主。日。益。千。種。主。と。も。相。保。二。族。八。十
餘。人。其。勢。大。六。主。作。務。覆。甲。主。刀。刀。弓。鞍。も。つ。る。ま。く。若。底。湯。て。暮。る。

京白川の貴賤衛より先く見ねた事の件紙より御文をうけたる四月二十日
際附の吉會行は今度東國より大功の軍の抽選が行はれ、一とくを人
臣件平右大臣恒徳と始て三卿職事車陳度上列、さるも叙位降目あつて
夏原秀郷と從臣佐下と受け度矣下野奥園の守りにあつて平左衛門を委嘱
官より直に從み佐下より氣くをもる助より徳左衛門下總二ヶ國公賜ゆる年告
鹽と守護守内兼行へ上野守其が志をよほひ濱原よりえを請ひ十ヶ所の
所領と賜て安端でぬりあらうから折支鹽へ生えまくね門が蓬毛と起てて其機と
足利と本草あつまゆる承平二年のまゝの酒徒老が右近具とくに御守と清
きるが吉向より供奉七十人相與し其の様實よりあらうとくに出来まく
久盛の定と親王様家の不遜をもやあんとたのがまくまよまうとて跡
そ居くらきの所すまくに移くべきが極る小法事も門うもあらうだやあ附
執柄家よりはてて彼の旨意とだまし件紙度をあざもあれどかのふ度てかれ

引抜きひひ何をぬふも子細あんとひ恵と其件と仰て是差付件聞に令
まくとく用ひの件よろしく其身の眼と其機とをまろびてひと
達ひ方を以てまくそりそのる圓のむ運よ殊歎せりとよかきしもよとて人勢と
相具やうあるくへ僅を凌千人をも足らずされば今度下の讐言とあらざり
そひあらはるに恐ふく終止まし何とぞ今度く東あらうとくう其後時
く度下よげ育とやくほのそと旅をしてあご車の微ある中よ深伐あるまく
ひと再三ヤクれども久盛の門親しに一族もくじけ游あらとしへ門の不和私共
富吉もく偏執のゆうとくとく竟よ件寄あらうしがぞるく東國よつう世
の叛乱とあらう渭川を一々盛とよく其機とあらんあらと黒してひ合ひう
ね門首懸歎門秀郷射百足

さかとにね門が首檢非違役親家七條河原をもくますひとくあれて無う
牛めいと名ふ書く事相虎の大路を少く渡したの秋の櫻木の桜木の桜木

の老若市とあくさんねと痛がみへ東夷の親王と冊封威を八別とす
今日と小國の連賊と成て物とあせふ遺として公或はる門が首を刎て
曝と二月ほど其を芟せば徑生るがごくに眼をも塞て死と歎く切
きとあ侍い行きの跡あるかと本を頤徳と今軍と來るを
さる間丈人を悲畏と見ておる一すよなき人あまを聞く

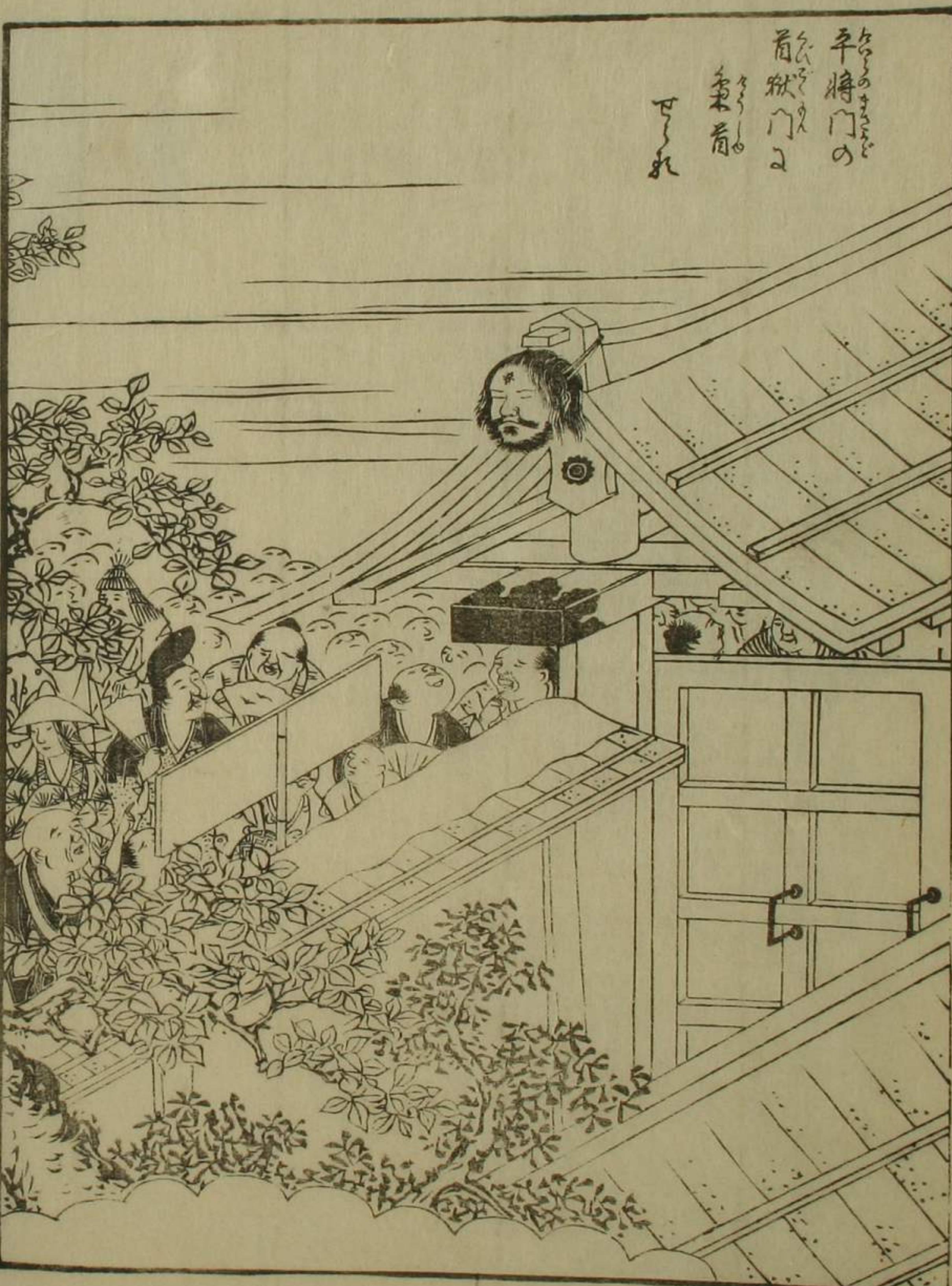
お門を示すよりと斬らきとれ儀後とくさんへことじと

と僕うをばけ角かくと多ひもう眼忽ち塞たり其後も東幽懐く
あひくに直充て空よ翔て武藝園とある園のわくにそ遊するをうめ
秋を欣祝してゐる人おと冷ましとくものかゝる帝代の舜太と見へ
たうとあはん多く應く其跡に叢祠と建て神國の神とくらまこと
其念も絶えずや異ある子細もありうるに因ふを秀にて下野の役
若く國勢と行きとるがをあ圓すお宮の神靈事と修復一役多の功とは

金銀器を宝きり掠今かく傷よ造言されお殺を乞うる頃秀卿朝故
御門を退治せんと欲すの時先帝社の傍ぐ傍く御坐して七日余餘せ
タクニ夏中又神祇社壇より出でぬ門が扇公お爲ととぞとされま
未だあくとぞく孙唱作の扇公かとむけうる果しての門邊う休て秀
其扇公ひとぞれがゆくと申社の御加護とぞひるをとて今度と居の別ひ
旨公奉同でとせられ則勅定あつて号と正一位勲一等日光大内神とぞ賜
うるを假て秀公私行のもとおけ事と經よりと神威と仰せよとす非仲
もん己貴令奉伏令ありと號を補挽爲ひとく其分野を嶺とく
狼狽を役と自室を薦て宿すとおれどお筆墨思ひ寄らるの御邊を深く
香美種の花木長と盛り人間の度たあいだお約束の後承あり然も
秀公の心も幽々と生まつてゆくと申事ととくと又儀後とと申事とと



前二ノ四十三



辛將門の
首獄門の
妻首
され

和年の頃、近江の勢固である。長二十丈、幅一丈、高二丈、腰頭といふ檣
より、ひたすら秀郷が、も帰らず甚て飛騨の移作其勇威を感
じ忽終る。人を失へしが故する所、従うかとて、もひととぞ秀郷
降城へば、おもと癪を賣て貰財に一二の手あらむ。はすての矢
と當と呼んであるを射と遡よきと於神のみ教ひ秀郷とぬ中納官より
かの童子一人秀郷が、まことに、刀、旗幕、卷綱、簡儀庵丁、纏
ち、厚く恩と謝り十種の宝器と賜る。刀、旗幕、卷綱、簡儀庵丁、纏
を、赤坂家のを守りあり。後世、赤坂本家、浦生氏郷の家傳り、秀郷の代
葉あ延生の後孫からして、後蒲生家、忽ちぞ又、儀を継ぎ、代
て、用そをもはば、後人深く儀の庭とぞ。小姓をもてび穀をば
とくじを紫とあらう財を金をも備へ、衣裳等の備えり。まことに其名
儀義ともいひ合ひとくや。

官軍向純友城金給

さくよ純友はまだ毛海より連兵を振ひ、八月十三日、船泊まで二百餘艘の兵
馬門を破り、倫室、平野務と引率て、二月十三日、船泊まで二百餘艘の兵
船と、十九日の辰に、毛海を出、國金をもあしよせ、敵の陣を見、夜、東の御崎へ
海の面をかすめ、十町ばかりを笠戸とすり、屢々と三三するが、近く切岸とすり、その
上に屏とすり、三三より舟櫓をかねての方へ、海の表より船を駆け、かく走は
ゆるを三三せず、とぞ、幕へて、南の脇より兵船二三百艘、傍らを横矢を射んや
まく、城中より近畿の兵士衆、たゞとぞ、もくの旗の紋、ゆ映す、勢の多
が、あらねども、是百艘、舟櫓、と、翻轍、と、く、錦と渡す、と、あら、弓を引、紀伊、淡
路の中より、名練の達者六六十人、歩くを、毛海奥、夜、乗葉、海中より、赤瀬、千石を歩
せる丸船、車も歩く、板、捨草、雄の兵、兵船十艘、サ艘で、漕あく、唯、一様
と桃合の城中より、純友士卒、よ向て、下かゝるを、すよ、敵のまゝ、又、義門の兵、とも

あれは唐の兵も船も其の勢ひはあらゆる自自在あらじ味方の兵へ敵と争ふ
まゝ船とまゝ敵あらへ取と取との戦ひをぐれ又権亮純まゝ向島の澳の汲通と船を
かせぐ軍とみほの討伐と金ざるふより敵の後とまゝまぐれと權亮軍の
手分とぞくまうたる船と官軍の太お倫室へ味方の謀敵よりまゝ又お後と至
てけりと國く繁とまんともやびとを船の兵とどもとどもに日が暮れ今宵や喜び
ぬれと定と及本とんぼうとれあらまと語く船と船とぬまでも敵あらくまのぎうれ
びとてい度院あくあくあくとよと急きま縫すまくと高きの傾城妓女と春壽圓碁
雙六とあく日が暮るゝと酒宴と碑を傳へまのれの差がうあく紙とこち
一の用ひの体はあくううう倫室とまくとまくと闇と一懸船と舟と燒せん舟とも
揚と二月廿九日の間の夜と甚方とよ押あで故船近く底とを敵とあら船と敵
と舟と壁とよ敵の船とまゝ移すと透るもあく切くかる防兵と舟と舟と舟と
岸とまくと敵の船と騒びあら紙と舟と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙

よのくとを却ちてかくらうふね純友は隊中よりけ縛とくとく敵本陣へよまきじ
かの邊をもあく出陣と取ておもむくかくく敵味方入射と呼響んぞ然
しの晴ひに敵をすゝととももひしきと多くて空駆武者多くあくとれ付伏
切伏はよよ鷹ひ海よほりまはるもさるぐ紅葉くぐづうきりわらやけ隊長
今處をぞそぞそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
彼よかくひよ言ひ駆くくまくかくまくば軍始しそ相國の財を今ある
ぞくとく其の兵數三千餘禮様の拂く拂かうたびの領土をく塞く
蘇波と假り浪うどとぞそそそそそそそそそそそそそそそそそ
タる官軍前後は敵とうけを返自在あくざくえくれべ純よ氣ひ肩くこ脣戸の
海うととく後は後引くらうる官軍利あざれば純友孫連威と権ひに國
は幽人略破う有とあうぬ其のよ阿波久國周がくとあるも官軍よ馬ノ刺
今度の兵人を不倫定と云ふとく迎日没するがたより聞くと生一が純友急死

押さへて退坐すと其用をとぞして、十五日程二十日御前純友が勢
七千餘騎はよもよと各々敵を殺めかうとしてもむだ橋の面より殺され
勝負と一時まことに我をよそにせし官軍へござと殺ひととの敗法は
しをえず射ひ墓を委駄だれか敵脇にまく七千餘騎とてみゆく
乱杭連本引のけく掩捕の際まで殺さく一息絶く脅きうる官軍飽まで
敵ともじこよを討きまく相國の元士とよきとび援はまく切く見え東
全之勢もあらずとも仲よきうち一人もありまくこそ殺さうるが、もろく
西の佐人堀尾吉左衛門資宗、疾り官軍又馬上敵の横合より文字をすく
おそれば純友もとくに敵を殺さうるの鼻と引くせば又ものいの姐すうを傷した
の足立と助を殺さうるの鼻と引くせば又ものいの姐すうを傷した
倫寔と百駒猪也と一齊みゆと寄て、また城塞ぐわくにうち純友滅ぶと勢
ありとども二方うち内財と切くかくくるるがとよぬとがくあつもかく

機とまことに裏くそむく二方の官軍入籠とあらば難伏うとて切に密捕
高志と多くを殺しよ候もととてす機とほ弟を二子保内又すと是十八
猪也と金を防ぎ射するる先日のたと猪也とへ候よう取るがとよぬとがくあ
ゆく

純友手記中國法

斯くとて往復機純友とひの詳定より東國平ぬ門迎江路より攻よるが
純友と淀と守り陣を立ててとくに門がよ居て今やくとる不
よ東國の機と、さうれ二月廿八日又ハ門が首領殺すように事本とおなれぬを
國をなげ移ふて機と生ひてさんとよふよちる十二月、安慶を國へ向へ
アリ金才十席を美純行僅よ付成され、金が得て引返し又修築國へ向へ
在舊の佐純も始ひ三月修築し、圍トが二百強よりは小舟一艘、舟を
くゆりをねまく、医と水陸の旅を集く詳定逐々とて考と法方へ



今まども味方小勢を取利を失ひ是と今方へ味方の軍勢唯すよ
城中圍より始く次第より及ばず長門圍より亦來はばなれ
てよし兵士うがひ敵と候べてとも先軍勢の軍あと有るに據度を候あまゆの勢示
七千弱より候う全軍を遣て候ふて否くあじくと右兵の候純事まと官様
亮純素より平々百騎を擧げて之ノ軍を殺却へ三千餘騎と引率一ニ月足り月
金傳とすと之をもとては城中守候事圍を城城より精勤めく全員ぐとそと月
朝日印射より城の事方ニニ黒行革のどくお圓を一日未よ及候一候る極
にちもす事を文純行と廻を引継ぐるやうトシ候事もくに遠くご体方
多きもむ流よ付かれてと又々され今後をとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
くよきも入をよくに遠くして今もあひに付かれてとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
城は城の後城中被後のあ圍へよどまらずれいゆて安泰を圍よ寺通う
丘の庫み経財が豈ともまを比擬するある二月二日より及ばず一日遅延て入る

の是とほつ月十日又周防國サ那須食の城ニ奉周防外村種及ヘトム
西國オの太河右田川と伐ツク後一息とも経て又六日攻ヲレドモ城中空ニ
弱リテ安モハ毎日二百人三百人を負ひ外攻シテ之ノ純友崎と名乗リ
ハヤシ僅の一城より多くの軍勢を費シ超日以送スガ味方の士卒櫻を壓シ諸侯の
故都ニシテ是の一族一あ久を殲シテ全修筑ヲ破ヒと聞セ同月廿二日長
門國ト而ヒクマニ良列補田の城ニ浦ト大内久保俊也在系トモハトル
即從幼稚の子息と守久在城モシガね故國中ニ來テ宿禰義よみば
室ハ遂う保俊在系ト城中又西の志仁と號フ又人半身始終モト
されども不義は既ちう矣と傍見テ之を嘆ケ難と云々と申す計墨多
らまふ事無しと其本階ノ補田城出小浦にて彦羽々久の
主ベ同月又月修築始純友補田城又號ラ國中ノ居城也又其日の晚
主ト西國往人舟木肩輝武一族相與一經モの酒肴と昇てく事向テ

御身の方面へ敢歎頃より遙くから備後守を遣てさう純友輝義
又向くはも今度大倭どもひまの下す國の軍勢ねざるよ他集つ所の城
廓及びふゝ庭ひ靡くまよ下り重き難ばまよとて國公征伐せんと號の弓
矢たがれとみ津アマレモヒトシヒトシノ弓矢同様ノ滅フ清辺のてくも國
の士平水の下毛コス乾がごく馳幸し奉を候テシモの武徳莫ニ叶フ
やかう松本直圓又前くとても多々御船の秋某ニ修付リシトアリ
嘉例より者時朴功自皇后三韓帝征伐の付キ行直圓フヤマサモヒ軍船
と被じらゆきとら其料リと材木薪水もよ長サ十餘丈回り千圓の補
木あつ候事のねくとまよ船体ト多シよ堅て不のてくとく斧もたぢ
ぐくいとととととととととととととととととととととととととととと
法師ヨリアモアヤニ其船ニ件の船あると船の船とさうに木舟としてそ
あうと取自尾斜うとて收びゆきとまようちもとの司工修く御船の船と

也其後皇后三千の樓船を定めニ韓及干珠滿珠のあ顆サク数万人の夷
兵の弱り一毫もアヒ皇后をもひち御、うの未弭生く新羅王ハ日本の大主と
石磐書付くと夫國有欲を鎮守る軍ニ新羅ヨリメニ二韓の久留ミ軍
ノ自皇石凱陣ぬしくた件の御船の本底求キよ前を船本と名付某が先代代
かと云ひ、其の名底はとくと仕合、及其例、伊セ某御船を立トヤベ
車九列御退船の内時日以候、トヤタシヘ御友とくと羣賊の憲ノ内トノ
多岐海至浦万里の差違がとくと聖文神武之御とくと化邦を征してまた族
賦蠶夷のれをとくと國事公覆に謂つて方益をもくと考究すありとぞ
多々皆の信者公魚もくとくに知人

延祐役西海下の忠平ム群攝政

絆據純友ム陽尼と切靡ケ長門國赤石九列、キハナクれバ國中二に
強弱一聲で東西ヲ北遠ひ者有ノ事とて古ニ邊境ニ達する事大貢牛勞牛耕

桔と頼に軍を固く一旗に集く軍漢國より至る二月十一日辰刻

うちも度内時又軍始く敵味方の縣波浦風よ相和く鼙鼓至る重慶
歸山と揚山海よ勁援しをかゝ害源りて帝新羅の國もかくやとそそく畿
一金牙工船を支と產殖男を率進敵を逼ひ勧めのくわうとぐるとも軍
急に火焚く難ひかうと作も敵も勢も甚しき事より其兵強立僅八百弱
と逃れぬ後國と云ふとあちこちを駆逐しはまくは未一兵無事に
若とすと向くわ月を老成せしむれども於く候絶えを寧府に入國。軍
士も未だ未だに三ヶ月と経る九月二日ノ夕く廻鹿を出たるに起て
お園の賊徒見しに追すと擣起幽の馬をタタキする事ほえりて
活中又と云ふと追へるを追捕役と下る。又と云ふと逃げたる者を追ひ流す
野好古敵徒式別係經基と追ひ搦むのあくねくく宗達の人々にかきつて射
殺矣。未だ未だ未だ馬助少滿仲兵部丞と滿政兵庫左門滿季。左

唐守門庸岐よ野様に備せ。縦坂助門備重出羽門備頼。守門充阿波守
小野保衡石原を支脳。平發志。教住其田仕兵房尉加多重光。然本押徳役。門修
傳。門修。貞正。門修。貞正。門修。貞正。門修。重光。ト経は吉季。南丹波判官盛。國守。若
行佐人。門修。入道津。門修。大塚。様雅信。代理。則家。進。自信。嵯峨川。佐多守。武重。若
兵濃。檜久浦。と。内多廉。復福。新助。則家。進。自信。嵯峨川。佐多守。武重。若
行佐人。門修。大井。左司。於資。自守。門修。左司。村屋。孫
左弟。門修。左田。左田。右田。左田。千葉。門修。正貞。文慶。高坂。と。重。を。ひ。た。便。内。全。
日。門修。三郎。大井。左司。於資。自守。門修。左司。村屋。孫
左弟。門修。左田。左田。右田。左田。千葉。門修。正貞。文慶。高坂。と。重。を。ひ。た。便。内。
時。澄。小川。丸。弟。元。方。右。源。左。司。右。源。佐。平。二。成。敬。ト。部。也。於。丹。波。大。内。多。平。安。
因。入。門。修。大。井。左。司。於。資。自。守。門。修。左。司。村。屋。孫
左。弟。門。修。左。田。左。田。右。田。左。田。千。葉。門。修。正。貞。文。慶。高。坂。と。重。を。ひ。た。便。内。
安。定。多。承。暉。よ。ぞ。丈。と。う。物。ひ。に。移。改。年。二。ほ。く。く。と。石。多。く。と。有。も。丈。尾。の
譲。父。ゆ。く。與。親。处。喜。の。乃。と。退。ひ。位。一。不。を。極。め。官。明。廟。と。ゆ。く。と。一。人。と。師。範。



12 海より倭刑うち善く百官の職と従くま事機の政と務を勤ひに今在陽城
兵革やむとてかゝる艦の貢院又馬が船より聞流し尉様方のみとり行
賊と遁き長孫を忘ひた震ふるく官公卿從志に政と立國の立と退て身
と立の郷より退るよからず終く教と接く持政准三官主と辟へゆき上
表と審候ありと仰やまとくも陽と言ふ事平あり賤う禍罪あら萬方
と立くとさうとよくな萬方罪あらば罪賤が躬はりん今に天虎と死へハ差う
坐すと賤う不當とよくなほど罪と爾よ歎せゆく則彼と表と返へて至る時
辟延の儀へ執許うち久居とぞ圖へて是と謂ひと云ふ事下に御車と局人
候とあそべたり

人内保後以謀廻田居城

13 之往よ七月朔日追捕役安寧の廢帝取があると一日余多あらと非る宣勅
と蘇せらむ幣車経て後け筋どう陸路と壁く周防長門の敵と及く、山

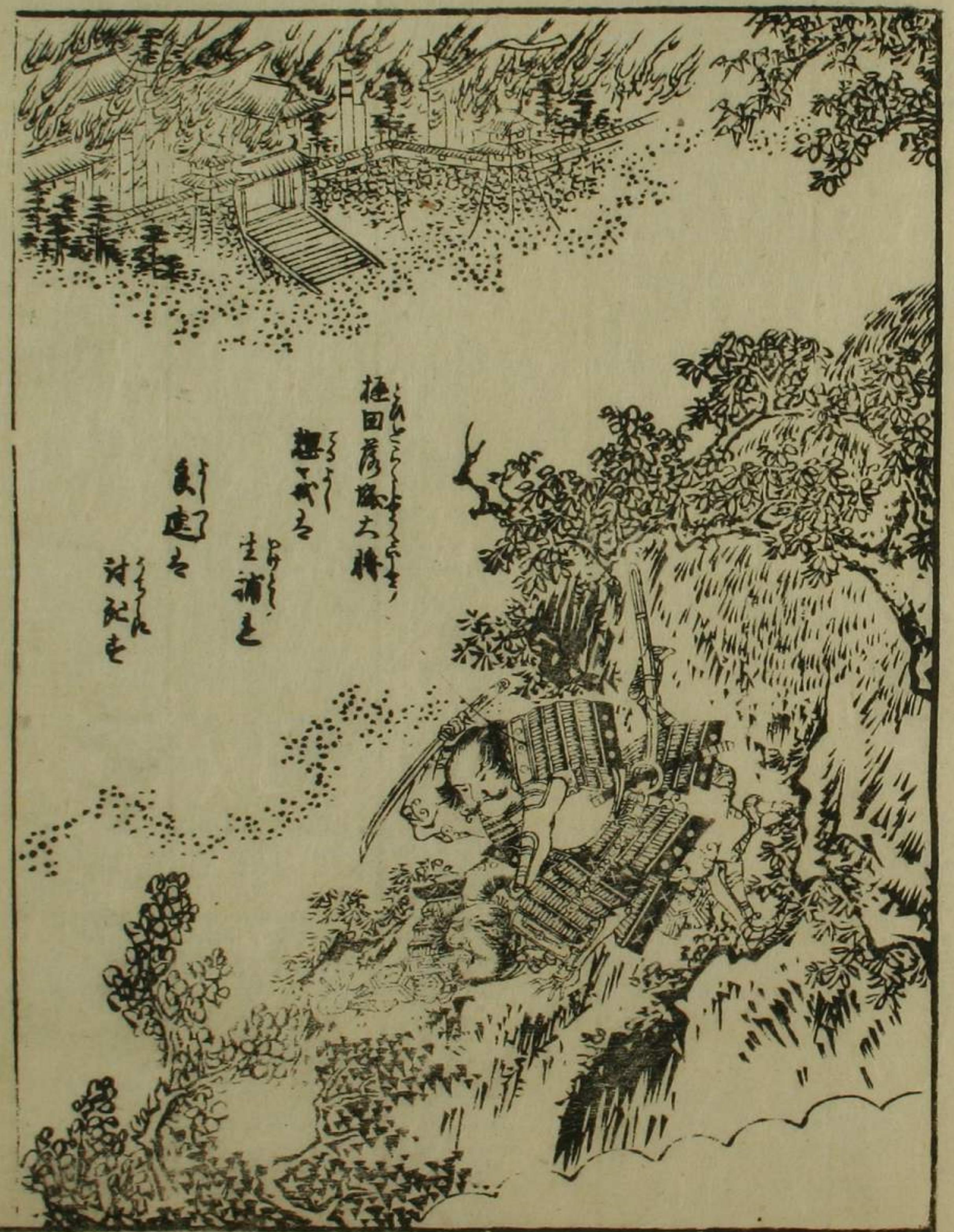
陽城の勢と掛け合は事不攻られべと仲室あらと承りとて又へば西國を
すれども高麗を更化体あ体中納後お玄偏老の勢あらかこに傍玉居たる
居令と秋後と孔加と名前と重慶のとくに元國とらあひと源すり防
犯金を公圓たる賊使し軍と聞くらやく長安せば敵の大勢後どな走へ然う自
在方を滅びとく七月に自備金の寄りス千枚馬長門圍へと引くやく敵中にと
古と伏見と二年修築あらかじめ近づけ所とも寄りス千枚馬修築まで大ねま
破因惣久良連続のとく車と人馬がぬく付はばと官軍大勢を及ぼすと
離と赤馬の踏殺ととされしものと云ふ事と官軍大勢を及ぼすと
も負ひ其敵とかげ長門國極圍まで其迄十里がる一軍もせば一里も踏止
らぐ遠くと居者くるる今約とス千餘騎と聞へて二千騎みも足らず
それとも病神のめうほく一轟よりと多く敵と宗家將の者一人も討まし梅薙

あぞ名前あるを徑か追捕後周の國府より多へ奉周防分頗種口千竹焉
て年々とある對面ありと長きの參謀躬至の方と製圖せし於頗種相附
やされなるは先月純友九列、後海の附本庄同輝義と年餘騎をお保見崩
極団隊も終無くい務るに今度減食と圃へ勞の隊よ巡行せしと御、バ軍勢
七八千騎もひづれ申極団隊へ長列オの要害ゆくは破の事と海セテハ
始終の害とおひ生ず所勞とをまゝ所退治あつてもやとヤシミシガムの実も
とく經く所波は保衛と大和一く五千餘騎をうち奉周防分と幸内史た
おそくも高勢合く一萬餘騎極団隊へぞ向まくるあくに及軍の中へ大内
康俊へ長列極団隊をあしが今度在系の歴立の間純友がるよ城と幸内史妻
み徒顏も行方知らずと聞く情ふる事斜をば従ひ今度彼城へ保衛於程
よ大内を賜りして幸内史と申すとひをえまよ而まくヤシミシガムの傳とより
相傳の志城を敵のるの跡よめきを剝(所領)も易ドと名ケ康美と稱あう

身にはとて今へ我令何の用よシテ身を取次主へ自ら始く所時もすく極
因よリノ様を奪返し候と敵をもとぞりて今度の付より度へ本こそ遺恨
もと仰とぞ堪忍うべし私を幸内下の人の目又修るをどのをほくし難懷
を教せんとぞひいたとよまよされが弟人を同をはくをと申下りうれども併の
城要匪よくまとも弁の急のへばと後から申すに極へ申まよをあひばくう多
べく方侵もふくふをせんとくみびとひ碎く相謀く其教導よ防肩を主
極団へ向ひてくら程よ四月七日官軍極団と神勢三方より攻よと追ヒ
延下し火炎とゆてこそ致ひるを本城へ寃光の切所ありに兵八千餘騎より義
たとバ官軍も攻あぐんでぞ又にいたるかアモ其日の晚京よ大内氏康俊そ
の外の無と城もんぐるを草威の曾若と軍勢の中よおもてう家のみ中山
才治乃經とを免よ鎧へせたるよ出立く其勢又百餘騎旗ともまくと三井舟
とも付くとあの尾崎ようどようするよとひ故ふ國中隣國の者共か

とんかほにあらへ官軍にも隊中よりも敵とも味方とも見えぬが双方戦と止く
軍のやうと竜ひえりてに坂井より旗を一丈あるとゆづるがれを紫
うち隊中へ後退のあるて打向らるる勢の中並あ圓の位人多く良新故不秀
はるは今日下津の傍よりが今日の軍より連るる抜草もくは今まに通
車トシテは隊中の人々がまよて脚出有て我々が別様の事を序先と傳の
機運より兵士と勢ぐるにあむに向て開を上りて官軍も実ぞと見
ぬくとして歎かく有りて我々遁りとすを怪ふと一人も隊中へ入るや
て先陣の兵千五百餘騎ヨリには無うて大肉々の兵とも無くも痛
も然らずを矢が射させし隊の方へ引よる隊中よりも無く遁りてあゝ而
く味方伴もろとも一二の間と開く八百餘騎落伏するべく數十代
たゞ大肉々の兵とも多くの歎嘆方と我拔く八百餘騎よりまう余るく隊
中より入るやうと往く其日もや暮よ夕うとねみ本店司輝公並

滅全のころ草壁圍惣を良連と申す者と云ふじくと居たる
を滅の経はる事多き良新などと云ふと之を對面へて九列のやうと四
方皆小資男はくをうへたる者と云ふとやうにからくる日本を多く軍をい
見そ向まへて治勝立をとどくば今だ主勢を九列へ滅すて英國へまん
あ止とけ難の後援のゐるゝ軍勢二千騎を宰府を坐すがる後陣
の勢と云はんぬと下はの邊より船を多く相付ひとぞやく日へげ隊へも着
伏すとひづれの敵大軍より船をもととて定敗かはるべと多くりとあ
てもうちの三脚ひとぞうとばとも敵へ敗りりんがまでも英國の國より我が並
支本秀光陣とてよ柳のやども人をあすんとおどりて北海と云ふ所に
運まくとく今日の合戦もよどりて也然止ひよつて是が事方に缺
とねきがゑを愈へる甲無もとくとく定く敵へとちの後援をもくとて病



神が古今を一くわの事は今秋敵陣に對せば千の川も
破れ退散びてからず未だ後方の勢のあらぬるよ一敵へちじひで
面のまが又家秀もす奮してくる面目とこそ暮ドリと辟ふ色をまほ勵
くやさればたまよしめを曰トするいへども主謀半身の兵千餘騎
し氣く其勢のみ制づうよ様とお東あの尾よりてゆきぞあたつゝ
内歎ちるすに故とさへおこなふて今は官軍の財庫よりばんと比
勝の後ある人考の小在うちかかへ百餘騎の兵備がよそを縁をさし
因みに蘇波ととよてくらる城よりあるをもへ難をあひうれ開
き度のものもと難をとてす内歎の兵がよそを縁をさし
財庫を切くすりうるらうえをみてや具とさきと内歎
我えにとぞ逃げてくらる官軍をとアシムとあらわす綠波大丞と
里方の者と一萬餘騎をもてに内歎を以て嘗めとぞ

さやまの城すの兵をもとれば官軍強とほりゆくにあらば敵城
中は在て本戸と關へ入る進退をもとむとてたすまうれば禪義
も良連するがひそ下かせば花車あんまきをひだ官軍攻事に攻はけ
まきまみ竹へどもやうひぐん太性た性ふももくに江輝が連もそはくと之
ひ定くも強れ兵二千餘騎東あお畠より兵馬に継接よ切く西くされども
ま勢こ小勢叶ひて一人もめにけまつてうち江輝が孤もろと射をうち立
つあくまども被殺せんともう多きもあく周防の守渡出團丁八百
衆よ江野とてはとたれり連りへりとまよをうようへとひ後を切んとくと
よくと事あとまく間まの守の配軍桂兵房令く生捕つてまく
くると内みのさうつてとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

